

## 極低出生体重児で脳損傷児となった 児の当センター受診までの経過

(分担研究：発達障害の早期発見とケアの大系化に関する研究)  
研究協力者：岡藤隆夫、草野薫、赤塚章、落合幸勝

要約：肢体不自由児施設である北療育医療センターを受診した患者のうち、極低出生体重児について当院受診までの経過を明らかにすることを目的とした。最近10年間に北療育医療センター外来を受診した新来院患者のうち極低出生体重児で出生した191例を対象とした。初診時年齢では、1歳未満が約30%で、3歳以上の児も34%に認められた。主訴については、発達遅滞とともに初診時から神経学的異常を認め療育目的で来院となった児も多く認められた。当院受診経路では病院からの紹介のうち NICU のある病院で出生後からフォローされた児は28%だった。一方で、出生後複数の病院を受診していた児や、保健所、児童相談所、知人からの紹介となった児は105例(55%)であり、家族の不安が強い例や、フォローや療育が不十分な児を表していた。CT や MRI などの画像とともに紹介された例は病院からの紹介のうち17%だった。

見出し語：極低出生体重児、脳損傷児。

### 目的：

近年、脳損傷児に対する早期介入の重要性が注目されている。脳損傷児のうち、脳性麻痺の発症が極低出生体重児に多いことはよく知られている。このような脳損傷児が肢体不自由児施設を受診する理由や時期について調査することは極低出生体重児の抱えている問題点を明らかにする上で有用である。そこで肢体不自由児施設である都立北療育医療センターを受診した患者のうち、極低出生体重児について当院受診までの経過を明らかにすることを目的とした。

### 方法：

1985年から1994年の10年間に北療育医療センター外来を受診した新来院患者のうち極低出生体重児255例中、転居、緊急一時保護、救急医療目的、療育施設からのCT検査依頼のみの例を除外した191例を対象とした。191例それぞれについて診断名、初診時主訴、初診時年齢、当院受診までフォローされていた施設、当院紹介時の画像検査(CT, MRI)の有無について検討した。

### 結果：

初診時年齢をみると1歳未満は60例(31.4%)で、3歳以降が65例(34.0%)だった。主訴では発達障害(定頭未、寝返り未、坐位未、四つ這い未、つかまり立ち未、独歩未)、運動障害(尖足、片麻痺、下肢硬直、四肢硬直、身体硬直)入園療育希望、通園療育希望、整形外科手術目的、食事指導目的、言語訓練希望、神経学的診察希望など多岐にわたっていた。発達遅滞、運動障害を主訴に来院した141例では、1歳未満が56例(39.7%)、1歳台が57例(40.4%)、2歳台が16例(11.3%)だった。初診時診断名で

は脳性麻痺149例(78.0%)、その他、精神遅滞、てんかん、行動異常、境界児を認めた。当院受診経路をみると病院からの紹介は117例(61.3%)で、そのうち画像とともに紹介があったのはCTが17例、MRIが3例で、計20例(17.1%)のみだった。また、病院からの紹介117例中、生後からNICUのある施設でフォローされていた児は33例(28.2%)、NICUのない病院でフォローされていた児は42例(35.9%)、そして生後複数の病院でフォローされていた児が42例(35.9%)だった。病院以外の当院受診経路をみると、療育施設からの紹介が11例(5.8%)、保健所からの紹介が36例(18.8%)、児童相談所からの紹介が2例(1.0%)、その他、知人の紹介や家族が調べて当院受診した例が25例(13.1%)だった。

### まとめ：

極低出生体重児のうち発達障害で北療育医療センターを受診するに至った過程について検討した。初診時年齢では、1歳未満が約30%で、3歳以上の児も34%に認められた。主訴については、発達遅滞とともに初診時から神経学的異常を認め療育目的で来院となった児も多く認められた。当院受診経路では病院からの紹介のうちNICUのある病院で出生後からフォローされた児は28%だった。一方で、出生後複数の病院を受診していた児や、保健所、児童相談所、知人からの紹介となった児は105例(55%)であり、家族の不安が強い例や、フォローや療育が不十分な児を表していた。CT や MRI などの画像とともに紹介された例は病院からの紹介のうち17%だった。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 肢体不自由児施設である北療育医療センターを受診した患者のうち、極低出生体重児について当院受診までの経過を明らかにすることを目的とした。最近 10 年間に北療育医療センター外来を受診した新来院患者のうち極低出生体重児で出生した 191 例を対象とした。初診時年齢では、1 歳未満が約 30%で、3 歳以上の児も 34%に認められた。主訴については、発達遅滞とともに初診時から神経学的異常を認め療育目的で来院となった児も多く認められた。当院受診経路では病院からの紹介のうち NICU のある病院で出生後からフォローされた児は 28%だった。一方で、出生後複数の病院を受診していた児や、保健所、児童相談所、知人からの紹介となった児は 105 例(55%)であり、家族の不安が強い例や、フォローや療育が不十分な児を表していた。CT や MRI などの画像とともに紹介された例は病院からの紹介のうち 17%だった。